

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 7 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530605

研究課題名(和文) 社会問題の戦後史におけるオーラルヒストリーの意義と可能性

研究課題名(英文) The significances of the oral history on the social problems in postwar Japan

研究代表者

桜井 厚 (SAKURAI, Atsushi)

立教大学・社会学部・特定課題研究員

研究者番号：80153948

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後史の記述や継承において体験者の語りやオーラル資料が、有効な資源やデータとして活用されているのか、その現状を把握するとともに、その活用にあたってどのような特質があるのか、を検討することにあつた。そのため戦後史のなかで複数の大きな出来事を取りあげ、それぞれのオーラル資料の収集、記録、保存の実践について施設、団体、個人を調査し、オーラルヒストリーの意義を、歴史的事実の証言というより、むしろ地域のまちづくりや現在や未来へつながる死活や人びとの生き方につながるものとして活用されていることを確認した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to investigate whether the narratives of experienced persons and materials of oral history have been used as the effective resource and data for the description and inheritance of postwar Japanese history as well as understand the current situation of making use of these narratives and materials. Therefore, selecting several historical events among the postwar history, I have researched on the way of collecting, transcribing and archiving materials of oral history about each event. Each event is associated with industrial pollution, natural disaster or riots in postwar period. Research findings are that materials of oral history have been used for the resources of the town planning and lead to our current and future life and the way of life rather than the testimony of historical facts.

研究分野：社会学

キーワード：オーラルヒストリー 戦後史 オーラル資料 語り継ぐ 語り部 水俣病 三六災害 コザ暴動

1. 研究開始当初の背景

(1)1970年代以降、国内外に個人的な経験や記憶に照準した質的な社会調査法が注目され、なかでもライフヒストリー、ライフストーリー、オーラルヒストリー、ナラティブ研究などと呼ばれる個人のオーラリティを重視する研究法が、現在に至るまで盛んに行われるようになってきた。もともと客観性を重んじる社会科学においては、記録は文書資料中心、社会調査は数量的に計測できる統計調査に重きが置かれてきたが、「言語論的転回」と言われるポストモダンの認識論の登場によって、こうしたオーラル資料への新たなアプローチに注目が集まることになった。この動向の背景には、これまでの客観性、一般化を重視する科学論に対する懐疑がある。そこには主観的意味や意味の多様性の重視や社会調査における調査する側の権力、権威への問い直しがある。

(2)またオーラル資料の利用にあたっては、次のような論点や問題点がある。語られたライフストーリー（語り、ナラティブ）は、過去の事実の証言なのか、それとも語った現在における構築的な表象なのか。また、それは語り手から引き出されたものなのか、それとも聞き手である調査者との相互行為によって産出されたものなのか。オーラル資料の利用とアーカイヴ化の問題。以上の論点は、文書資料やメディア資料などと比べて、歴史事象を分析、解釈するにあたってまだ十分に検討されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後史の記述や継承において、体験者の経験的語りないしオーラル資料が、はたして有効な資源やデータとして活用されているかどうか、その実態の把握とその利用にはどのような特質が見られるかを方法論的に検討することでオーラルヒストリーのもつ新たな意義を探ることである。わが国においては「聞き書き」という市民調査から歴史学や歴史社会学の調査、さらに近年、いくつもの戦後史の社会問題に関する資料館や博物館などが開設されているが、こうした施設ではオーラル資料はどのように活用されて後世へ伝えられ、記憶、保存されているのか、歴史的記述と歴史的出来事に関する当事者の経験の継承におけるオーラル資料の意義を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究の目的から、以下の二つの課題が浮かび上がる。

(1)オーラルによる語り継ぎの方法論

まず、オーラル資料である語りがどのように生み出され、伝えられているのかについて体験者の語りを分析する方法論の課題がある。これに関しては、まず本研究を開始する

までにすでに収集してあった沖縄戦についての体験者／非体験者の語りを分析することによって、歴史的出来事や自己の体験をいかに非体験者に伝えているのか、に関してその語りの構造をある程度明らかにすることができる。これは戦後史の出来事や体験の語りを分析、解釈する際の一定の仮説を提供することでもある。そこで、子ども時代に沖縄戦を経験し、「語り部」として本土の中・高校生に語ってきた体験者の語りと聞き手である中・高校生の反応を分析した。また、沖縄戦が戦後生まれの多くの平和ガイドによって語られてきたことに注目し、非体験者が語る際の特質についても分析した。

(2)戦後史の記憶と継承

つぎに戦後日本のいくつかの社会問題、歴史的出来事に関連してなされた体験者／非体験者の語りの実践を探索調査し、その収集・記録・分析・保存のあり方を検討した。本研究では日本の戦後史における社会問題を、公害、災害、そして1回生の事件にしばり、そのオーラル資料を含む資料の収集と問題経験の語り継ぎの実践主体である施設、団体、個人とオーラル資料を中心とする質的資料の利用とアーカイヴ化の現状を把握することにした。対象を限定した上で、公表された報告者、作品、書籍、展示物などで、どのようにオーラル資料が利用されているか、該当する施設、団体の関係者や語り継ぐ実践者にインタビュー調査し、他の文書資料と照らし合わせながらオーラル資料の意義を検討した。

「語り部」地図の作成：2012年度では、これまでの情報を元に、戦後史の出来事の資料収集、展示、アーカイヴ作業をしているいくつかの団体と資料館を周り、聞き取り調査を行った。また2013年には、東京新聞の編集者の企画に協力し、全国で体験者の語り部活動が行われている施設、団体を調べ、全国の「語り部」地図を紹介し、「個人の経験をいかに語り継ぐか」を執筆した（『東京新聞』2013年8月18日）。こうした調査を通じて、公害や災害および歴史的事件の二つのテーマを焦点に、以下のような施設や団体、個人を訪ねてインタビューや資料収集の調査をおこなった。

公害：「水俣市立水俣資料館」や「水俣病センター相思社」を訪ね、資料のアーカイヴ化の現状や来館者への説明、語り部活動の実態などを調査した。併せて、当事者として語り部をしながら次世代への継承を目的に新たに「水俣病を語り継ぐ会」を立ち上げた吉永夫妻にインタビューをして、現状の問題と今後の展望を伺った。

イタイイタイ病については「富山県立イタイイタイ病資料館」を訪ね、資料館の資料と語り部活動について調査し、併せて当時の館長および職員にインタビューをおこなった。また被害当事者でもある「イタイイタイ病対

策協議会」の会長のライフストーリー・インタビューを行った。

四大公害病のうちの他の新潟水俣病については「新潟県立環境と人間のふれあい館」、四日市ぜんそくについては2015年3月に開館した「四日市公害と環境未来館」を訪ねて職員へのインタビューを実施した。

災害：研究協力者の岸衛は、長野県の伊那谷で1961年6月に起きた山津波が、谷間の村々を襲い多くの命を奪った災害に注目して調査を始めた。「伊那谷三六災害」といわれ、その記憶を伊那谷の人たちは「忘れない・忘れられない記憶」として後世に伝えようとしている。「声」や「文字」として残されている資料には、当時の有線放送の「概要メモ」、災害から3年後に刊行された当時の状況や復興の様子が記された「中川村の災害誌」(1964)がある。三六災害の「回顧」「経験」「教訓」「記憶」が「中川村有線放送自主番組」で語られるのは、やっと20年後のことである。その後も各地域の公民館発行の「館報」、郷土史『伊那路』などに関連記事が載せられるが、三六災害の記憶を掘り起こす作業があらためて行われたのは東日本大震災の後であった。「三六災害を忘れない」ために、演劇「演劇的記録三六災害五十年」、歌舞伎「三六災害半世紀」「三六災害を語り継ぐ会」などが活動しており取材を行った。さらに当時、濁流に呑み込まれ一家7人のうち、父と娘が助かった親子にライフストーリー・インタビューを行い、「災害の何を語り継いでいくのか」について語りを通して考察した。

事件(1回生の出来事):主に、戦後史の中で起きた三つの事件を、その地域の市民、住民の活動という観点からとりあげた。まず、浦安市郷土博物館では、1958年に起きた「黒い水事件(本州製紙江戸川工場事件)」から50年目の2008年に、「浦安・聞き書き隊」を組織し「黒い水事件」を中心に聞き取り調査を行った。その中心的役割をはたした学芸員にその趣旨をインタビューし、地元市民が自ら聞き取り調査を進めるといった調査方法の特質とともに、人びとが何を伝え記録しようとしているのかを探った。次に、沖縄で復帰直前に起きたいわゆる「コザ暴動」について近年、語り継ぐ活動が盛んになっている沖縄市市民の活動に注目した。具体的な活動の実態を探り、活動の中身とともにコザ暴動がいまどのように語られているのかを調べた。三つ目としては、現在も問題が解決したとは言えない「三里塚闘争(成田闘争)」である。1995年の政府による謝罪、建設側と反対側住民との公開討論などを経て和解への動きが急速に進んだ。その中心的な役割を担ったのが「地域共生委員会」内の「歴史伝承部会」(1997年発足)後の「歴史伝承委員会」(2004年発足、2009年からNAA歴史伝承委員会)である。この委員会には、反対同盟のメンバーも加わり、1966年の空港建設決定以降の歴

史的経緯とさまざまな立場の人の苦悩と思いを大事に記録し、後世へ伝えていく活動を開始した。その一つの成果は、2011年の「空と大地の歴史館」の開館だった。ここには、この三里塚の地域、長い闘争時の物品や資料、映像記録などが保存、展示されている。歴史伝承委員会は、住民の声なども収集、記録してきた。その歴史伝承委員会に長く関わってきた人や関係者に話を聞き、委員会の歴史的経緯と趣旨とともに何を伝えるかを中心にまとめた。

4. 研究成果

(1)オーラルによる語り継ぎの方法論

歴史的出来事の経験を語り継ぐ試みが盛んになされている。この背景には、ふつうの人びとの声が歴史の証言として重要視されるようになったこと、歴史的出来事の体験者の高齢化と少数化、語り継ぐ活動が非体験者によって担われる状況が増えてきたことがある。そこで、非体験者は語り継ぐ主体となり得るのか、なり得るとすれば、どのような構図が成立するのかを語りの方法論から考察した。社会に流通している語りには、大きく三つの様式がある。それらは、パーソナル・モード、集合的モード、制度的モードがある。歴史的出来事についての非体験者の語り継ぎにおいても、語り継ぎ活動の動機にはこれらのモード(様式)に対応する三通りのディメンションの語り方が存在していることがあきらかになった。しかも、語り継ぐ物語を構成するにあたっては、過去の出来事を過去の記憶に止めるのではなく、聞き手の「いま・ここ」に関連づける語り方の操作がなされている。非体験者が他者である体験者の歴史的出来事の経験を「体験」化する重要な契機となるのは、その語り継ぎが行われる「いま・ここ」の場である。沖縄における沖縄戦の語り継ぎの場は、家族や親族が大きな役割を果たしていることが明確になった。では、その出来事が起きた現地で継承する役割を公言している施設や機関はどのような役割を果たしているのだろうか。こうした観点で、次に戦後史のいくつかの出来事の資料や記録、継承活動を行っている各施設や機関、さらに個人をとりあげて、その具体的な実践からどのような活動が行われ、なかでもオーラル資料がどのように記録、保存されているのかというアーカイヴ化の現状を把握しておくことにしたい。

(2)体験が語り継がれている施設・団体

全国には、歴史的出来事の資料や記憶を展示、保存している施設・団体が数多くある。しかしながら、当事者のオーラルな語りを重要な記録資料と見なして記録、保存している施設・団体はかならずしも多くない。しかもその場合でも、文字通りのオーラル資料の記録、保存というよりも、むしろ体験者(非体験者である場合も少なくない)が歴史的出来

事をオーラルで伝える、いわゆる「語り部」活動の実践のほうが主流である。語り部活動という観点から見ると、資料館などの施設・団体だけでなく、個人で活動する語り部も多い。たとえば東日本大震災後では各地で被災地住民が自主的に語り部を実践している場合が多い。ここでは、全国で語り部活動が行われている施設・団体のなかで、とくに戦後史の出来事に関わる（戦争に関わるものは数が多く、ここでは除く）主な施設・団体を公害、災害、差別・その他、の三つに分けて北から挙げておく。なお、語り部には若干の謝礼があるが、時間の都合をつけて活動する場合が通常で、語り部の高齢化や体調のよって負担が大きいと、事前の申し込みが必要で、しかも団体を対象にする場合が多い。

新潟県立環境と人間のふれあい館（新潟水俣病資料館）、富山県立イタイタイ病資料館、市立四日市公害と環境未来館、水俣市立水俣病資料館：いずれも病状や差別の実態などを、被害患者もしくは亡くなった患者に代わって家族などが事前申し込みがあった団体来館者に語る形態である。

奥尻島津波語り部隊、阪神・淡路大震災記念、人と防災未来センター、雲仙岳災害記念館：特定の施設・団体をあげていないが、東日本大震災については多数の団体が語り部活動を実践しており、震災遺構などの現地を訪れるフィールドワークをとまなう例が多い。

（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構、都立第五福竜丸展示館、国立ハンセン病資料館、水平社博物館：第五福竜丸展示館では、ただ一人の語り部大石又七氏（82歳）を補助して学芸員の市田真理氏も語り部の役割を担っている。彼女によると、大石氏が高齢のため、現在では市田氏が当時の「体験した事実」を話し、大石氏が「思い」を話すような役割分担がなされているという。

語り部活動を実践している以上のような施設・団体のなかから戦後史を代表する出来事に関するいくつかの資料館と、私たちの独自の情報をもとに歴史的出来事を体験者自身がオーラル資料の収集に乗り出している事例を取り上げ、語り部ないし語り継ぎ活動やオーラル資料の活用の実態を調査した。順に、公害（水俣病資料館、イタイタイ病資料館と語り継ぐ活動）、災害（被災住民による三六災害の継承活動）、事件（地元住民による「浦安・聞き書き隊」の活動とコザ暴動を語り継ぐ活動、さらに三里塚闘争の語り継ぎ活動）の三つに分けて調査結果を記す。

(3)公害

水俣病は、認定60周年を2016年に迎える。その展示や記録の保存で中心的役割をはたしてきたのは水俣市立水俣病資料館である。しかしながら水俣市は原因企業チッソの企

業城下町であるために長い間被害患者が差別や偏見にさらされてきた経緯があり、現在も水俣病認定をめぐる係争が続いていることなどで、資料収集においても当初からさまざまな問題を抱えてきた。したがって、現在の資料は新聞記事と報道写真家桑原史成の写真を中心に展示され、登録されている10数名の語り部が事前申し込みの団体（とくに「肥後っこ教室」向けが多い）に向けた講話が行われているが、被害患者をはじめ行政や企業などの声が記録、伝えられる総合的な資料展示になっているかとなるときわめて不十分といわざるを得ない。水俣病教育に市が取り組みだしたのは資料館が開館（1993年）して、しばらく後1998年頃からである。開設20年余を経て、資料保存とわかりやすい展示という趣旨で2016年に改装がなされた。患者の手記などの個人的記録やオーラル資料収集、保存には、これまで積極的に取り組んできたのは、むしろ（財）水俣病センター相思社だが、現在は協力しながら資料保存を検討している。しかし、職員数も少なく学芸員もおらず、かつ数年の人事異動で交代する現在の体制は、継続して資料収集、保存のためにも今後の改善が求められている。

富山県立イタイタイ病資料館は開設が2012年と比較的歴史が浅いが、それを取り巻く状況は、水俣病資料館とは対照的である。原因企業の三井金属が被害患者の補償、神通川流域の農地の土壌の入れ替えの推進、資料館の運営費などを補助し、積極的に補償と公害防止に向けた取り組みをしていることである。その結果、2013年12月に「神通川流域カドミニウム被害団体連絡協議会」（被団協）と三井金属の間で前面解決の合意書が調印されている。長年の歴史を経て、被害患者から三井金属の間で「信頼関係」を築けたとの声が聞かれたことが、資料館の展示や解説にも具体的な形で反映されている。資料館では展示物について職員が来館者に解説、語り部活動も開設時から行われている。語り部は7名であるが、開館時から被害患者本人ではなく患者家族や親族が語り部活動を担っている。ただし、語り部も高齢化が進み、弁護士なども新たな語り継ぐ担い手になっているが、今後の懸案事項になっている。

再び、水俣病に話を戻すと、水俣病資料館の資料収集や保存が十分になされていない状況に危機意識をもって、語り部の一人でもある吉永理巳子を代表とする「（社）水俣病を語り継ぐ会」が2012年に新たに立ち上がった。「水俣病に対する差別・偏見をなくしたい」「次の世代に水俣と同じような経験を二度とさせてはならない」という思いから、患者家族や関係者の話を聞き、「どのように語り継いでいけるのか」を考えようとしている。そして失われつつある記憶や証言を掘り起こし、資料収集、保存することなどに取り組み始めている。この活動は、当事者によるオーラルヒストリーの実践そのものである

といえよう。

(4)災害

2011年は伊那谷三六災害の50周年にあたった。折しもその年に東日本大震災が起きた。繰り返される災害にどのように対応するか、そのためにも災害の経験をどのように受け継ぎ、後世に伝えるか、は重要な問いである。三六災害の記憶を語り継ぐ活動は、さまざまな人やメディアによって行われてきた。その試みをまとめた。1961年6月28日～29日、それまでの集中豪雨が「山津波」となって伊那谷の村々を襲った。そのときのある地区の有線放送の記録が残されている。その10ヶ月後、NHKは「日本の素顔」で、「傷心の谷間 伊那谷 その後」を放映する。被災した人の現状、とくに移住せざるを得なかった人たちの苦悩が描かれている貴重な記録である。

50周年を迎えて、さらに東日本大震災によって防災意識が再認識されて、伊那谷で多くの三六災害からの50年を振りかえる取り組みが実施された。主なものをあげる。

演劇：「演劇的記録三六災害五十年」(南信州広域連合)、三六災害50周年を記念するシンポジウムの前座として地元の演劇集団「演劇宿」が、地元住民の協力のもとで演じた。このDVDは、「防災学習」の一環として下伊那の関係各機関に配布された。歌舞伎：「三六災害半世紀」(伊那市長谷)、長谷村中尾地区には江戸時代から伝わる農村歌舞伎があり、「中尾歌舞伎」として親しまれている。国土交通省天竜川河川事務所の職員が、「三六災害50周年」を記念する脚本を執筆、中尾歌舞伎保存会に持ち込んだことがきっかけになった。八つの伝統歌舞伎の演目にこの新作歌舞伎が加わり、4年ごとに演じられることになった。映像記録：「あれから50年……語り継ぐ三六災害」「三六災害から50年北川被災者に聴く」(大鹿村ケーブルテレビ)。前者は、3人の被災者のインタビューで構成され、後者は土石流と鉄砲水で村の大半が埋まった北川地区の人たちの座談会形式の証言記録である。北川地区は、その後、集団移住を余儀なくされる。中川村四徳地区とともに初めての集団移住となった。天竜川上流河川事務所の取り組み：映像記録としては「三六災害から50年よみがえった伊那谷～そして今」(企画：(社)中部建設協会、制作：信越放送)「忘るまじ災禍の記憶～三六災害から半世紀」(信越放送)。ほかにシンポジウム、パネル展示、防災訓練、座談会などを60団体、100回の事業を実施した。出版物：『想いおこす三六災害』((社)中部建設協会)、ホームページ：「三六災害アーカイブズ」。災害記録文集：『濁流の子』。三六災害が起きた当時高校生だった碓田栄一氏が伊那谷各地の学校に働きかけ、大学生になったときに寄せられた作文から選んだガリ印刷で制作した文集である。その後、その文集の存在を

知った天竜川上流河川事務所の企画で、1991年に『濁流の子』が復刻、さらに1993年には『続・濁流の子 伊那谷昭和36年災害をのりこえて』が出版。小中高校生から受け取った作文は1000通以上で、これらの文書資料は天竜川総合学習館「かわらんべ」に保管、データベース化されたものは信州大学図書館に保管されている。

こうして、伊那谷三六災害の記憶は、地元自治体や地元住民、個人によって、またさまざまなメディアを介して収集、保存されている。

(5)事件(1回生の出来事)

戦後史のなかで三つの事件について取り上げた。これらはいずれも地域の市民、住民の自主的な活動が中心になって、人びとの経験を聞き取り、保存して語り継ごうとしているものである。

黒い水事件(本州製紙江戸川工場事件)

1958年6月、本州製紙江戸川工場の排水が浦安町などの江戸川下流の漁業に被害を与え、江戸川工場と浦安漁民との間に激しい衝突がおきた。これが「黒い水事件」で「水質二法」の制定の契機にもなった。その後、江戸川下流域の漁場は回復せずに漁民は転職、1962年には漁業権の一部を放棄、1971年に全面放棄して沿岸部の埋め立てが進められた。この事件は、浦安のまちと生活が大きく変貌していくきっかけとなったのである。50年目にあたる2008年に、浦安郷土博物館主任学芸員の林奈都子氏は、当時を知る人びとの記憶を掘り起こし、文字記録に残そうとして、ボランティアの「浦安・聞き書き隊」を市民から募集し、発足させた。一人ひとりの人生にこの事件がどう位置づけられているか、を探るだけでなく、その後の生活が大転換した浦安の人たちの人生を記録することをねらいにした市民の手による「聞き書き」の実践である。二つの報告書が刊行されている。「浦安・聞き書き隊」編纂『ハマん記憶を明日へ 聞き書き報告書1 漁業者・水産関係者編～「黒い水事件」から50年』『ハマん記憶を明日へ 聞き書き報告書2 女性・子ども・水産関係以外の職業者編～「黒い水事件」から50年』。注目すべきは、「黒い水事件」という地域史のなかの事件をもとに住民の生活の変化を聞くオーラルヒストリーは、単に記憶を保存するだけでなく、これからの「まちづくり」にもつなげる重要な資料を提供できていることである。

コザ暴動

1970年12月20日未明に、コザ市(現在の沖縄市)で、米軍人運転の車両が道路を横断しようとした住民をはねた交通事故をきっかけに起きた暴動事件である。暴徒が米軍と直接対峙し、米軍人車両の放火、投石などを約6時間にわたって続けた。25年にもおよぶ米軍支配、抑圧と差別に対する鬱憤、怨念がその誘因であったことはよく指摘されると

ころである。コザ暴動から 40 年になるにあたって、市史編集室の職員とマスコミ関係者、地元住民の有志の飲み会での談話からの発案で、勉強会「コザ暴動を記録する会」がはじまった。毎月 20 日に定例会を行い、当時の経験をすでに 60 名以上の関係者から聞いた。この会は、その後、「戦後史を記録する会」と名称を変え、コザ暴動から復帰、その後の沖縄市の変遷を含めて談話会が続いている。市史編集室は、コザ暴動をはじめ戦後史に関する資料、書籍を出版してきた。職員の伊敷勝美氏によると「その情報を出すことによって市民の皆さんが、わが沖縄市の歴史に興味をもつ、もしくは誇りをもつ」、そして「いかにして街を活性化し、人を呼び込むか」という狙いから、展示室ヒストリートで企画展を年、6、7 回開いて、情報を精力的に発信している。住民の一人として、精力的に会の活動に参加している古堅宗光氏も、こうした戦後史の語りの記録は、コザ市(沖縄市)のアイデンティティを探り、街づくりに寄与するものであるという。

三里塚闘争

政府および空港建設側と反対派住民との和解の中心的な役割を担ったのが、成田空港地域共生委員会・歴史伝承部会(のちに、歴史伝承委員会、NAA 歴史伝承委員会へ改組)である。この部会は、成田空港問題の発生から現在までの全過程を伝えるために、この地域の風土や歴史を含め、さらに戦後開拓や村々の慣習などの資料も収集、反対住民など関係者への聞き取りなども行った。その成果は後の委員会にも受け継がれ、「空と大地の歴史館」(2011 年)に収められている。空港阻止に向けて命をかけて闘った農民の声、建設側の現場の苦渋や苦闘の日々、地元自治体の首長らの悶々とした悩み、そして黙ってじっと耐えていた多くの住民の心に、歴史伝承部会、歴史伝承委員会が収集、整理した歴史資料のなかで接することができる。最初の歴史伝承部会の立ち上げの中心人物だった福田克彦は、その著書で「土地ではない土」にこだわる農民の叫びを長期のスパンで捉えていかなければならないと述べる。歴史的出来事の経験を語るオーラルヒストリーは、たんに「歴史を学ぶ」というより、文字通り、これからの生き方を「歴史に学ぶ」ことなのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

桜井厚、オーラルヒストリーとジェンダー史 歴史叙述との関連で、ジェンダー史学、査読無、11 号、2015、43-49
岸衛、災害の記憶を語り継ぐ 「伊那谷三六災害」アーカイブ化の試み、龍谷大学社会学部紀要、査読無、44 号、2014、

100-113

桜井厚、戦争体験を語り継ぐストーリーの分析、応用社会学研究、査読無、55 号、2013、79-98

桜井厚、オーラルリティの復権 『口述の生活史』前後、現代民俗学研究、査読無、2013、5 号、1-14

〔学会発表〕(計 4 件)

桜井厚、戦後史の経験を語り継ぐ、日本オーラル・ヒストリー学会、2015 年 9 月 12 日、大東文化大学(東京都・板橋区)ダニエル・ベルトー、桜井厚、経験社会学はなぜライフストーリーを必要とするのか ダニエル・ベルトーと桜井厚との対話、関東社会学会、2015 年 6 月 7 日、千葉大学(千葉県・千葉市)

桜井厚、戦争体験を語り継ぐストーリーの分析、日本オーラル・ヒストリー学会、2012 年 9 月 8 日、椋山学院大学(愛知県・名古屋市)

〔図書〕(計 6 件)

岸衛、桜井厚、立教大学、報告書：災害の記憶を語り継ぐ 伊那谷三六災害の経験を聞く、2016、88

桜井厚、石川良子、西倉実季、青山陽子、酒井アルベルト、張嵐、八木良広、矢吹康夫、倉石一郎、新曜社、ライフストーリー研究に何ができるか、2015、251 (21-48)

野上元、小林多寿子、桜井厚、菊池哲彦、佐藤香、相澤真一、中川宗人、高田知和、香西豊子、角田隆一、武田俊輔、金子淳、高野光平、大出春江、南川文理、飯島幸子、ミネルヴァ書房、歴史と向きあう社会学、2015、359 (227-241)

山田富秋、好井裕明、桜井厚、高山龍太郎、足立重和、島村恭則、三浦耕吉郎、小林多寿子、松田素二、有末賢、岸衛、せりか書房、語りが拓く地平、2013、266 (15-35、236-260)

桜井厚、弘文堂、ライフストーリー論、2012、171

〔その他〕

ホームページ等

<http://lifestory2013.blog.fc2.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桜井 厚 (SAKURAI, Atsushi)

立教大学・社会学部・特定課題研究員

研究者番号：80153948

(2) 研究協力者

岸 衛 (KISHI, Mamoru)

(社)日本ライフストーリー研究所・研究員